

日本キリスト教会大阪北教会2016年10月30日

聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書14章7～14節

7節「あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」 8節フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、9節イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。10節わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。11節わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。 12節はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。13節わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。14節わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」

《説教》『神とキリストは一体であられる』

◆今日の聖書の11節で、イエス様はこう言っておられます。「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら業そのものによって信じなさい。」言うまでもなく、「父」とは「父なる神様」のことです。「わたし」はイエス様のことです。つまり神様とイエス様と一体だということを言っておられるのです。「もしそれを信じないなら業そのものによって信じなさい。」わたしが行ってきた業、行っている業、これから行う業、それは父なる神様の御心そのものだから、神様そのものが働いておられるのだ。だからかりにわたしの言葉が信じられなくても、わたしの行っていることによって、私と父なる神が一体であるということを知りなさいと言っておられるのです。

◆それで今一緒に讃美歌287番を歌いました。これはイエス様の幼い頃から、十字架のこと、そして復活のこと、そしてイエス様が弟子たちに現われ給うたことまでを歌っています。2節にこうあります。「ガリラヤの湖の 逆まく波をも たちまち静めた 昔を偲んで 平和の主イエスの み力を想う。」イエス様と弟子たちがガリラヤ湖を舟で渡っている時に、突風に見舞われます。イエス様の12人の弟子の中にはペトロをはじめとしてガリラヤの漁師が少なくありませんでした。ところがそのペトロたちさえもが、死ぬほどの恐怖に捕らわれています。イエス様はというと、舟のともの方でぐっすり眠っておられたと言うのです。それで「イエス様、おぼれてしまいます」と、揺り起こします。イエス様は起きると、波風

に向かって「静まれ！黙れ！」と一喝されると、風波が静まったという話は、福音書で読んでよく知っているところです。その昔、イスラエルの民がエジプトを脱出したあと後、紅海によって前途を阻まれ、後ろからエジプトの軍勢が追いかけて来て、進退窮まった時、海様は海の中に道を開かれて、イスラエルを救出されました。これは旧約聖書が語る神の御業の中心です。イエス様は突然の嵐、荒波に襲われて恐れる弟子達を救われました。このことを見ても、イエス様の内に神が共におられて、御業をなさっていることが分ります。わたしたちはここまで、このヨハネ福音書を読んできまして、この書の何よりの特徴は、イエス様と神様との一体であられることを語っていることです。これはヨハネによる福音書の根本的なメッセージであります。

◆12 節を御覧ください。「はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、またもっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。」この「はっきり」という言葉は、何度も申し上げておりますように、原文では「アーメン、アーメン」という言葉です。「アーメン」を2度くり返しておられます。私たちの場合でも、誰かのお祈りに対して自分も心からそう祈りますという意味で、「アーメン」と唱和いたします。従って、イエス様の「アーメン、アーメン」は、イエス様の御言葉の確かさを表わしておられます。それでは何が「アーメン」なのか。「わたしを信じる者はわたしが行う業を行い、またもっと大きな業を行うようになる。」「わたしを信じる者」とは、キリスト者と言ってよいでしょう。皆さんはこれを読んで、すっと分るでしょうか。何を言っておられるのか。これはですね、ヨハネによる福音書の特徴は、先ほど申しましたように、イエス様と神様との一体性ですね。この12節の方は、私たちイエス様を救い主と信じる者とイエス様との一体性を言っておられるわけです。イエス様の内に神様がおられて、神様の業をなさっておられる。そのイエス様を信じる私たちの中にイエス様がおられて、ですから私達のなす業は、イエス様のなさる業と同じだということ言っておられるのですね。そればかりか、「もっと大きな業を行うようになる」と言われるのです。

◆イエス様の伝道活動は主としてガリラヤ地方に限定されておりました。そのイエス様を救い主として信じる者がキリスト者です。その信じる者のうちにイエス様が一つに成っておられる。明日の10月31日は、「宗教改革記念日」です。今日の牧師の落穂拾いに書いてありますように、1517年10月31日から数えて明日が宗教改革、409年目です。宗教改革者マルチン・ルターは、「キリスト者は小さなキリストである」と言いました。キリスト者とは、勿論キリストを信じる者のことなのですが、キリスト者は小さいキリストである」と言ったのです。クリスチャンは、確かに小さいのだけれども、「キリストなのだ」とルターは言います。ルターは本当に聖書を読んで宗教改革のきっかけを作った人です。徹底的に聖書を読んだ。ギリシャ語もヘブライ語もラテン語もよくできる人でした。カトリックの修道士でした。その彼

が聖書全体をドイツ語に翻訳したのです。一人で、それくらい力がある人です。聖書を読んで、読んで、教会が人々に教えていることは間違っていることに気がついたのです。それを率直に公言したものですから、結局、教会から破門されてしまいます。そのように本当に聖書を読んだルターが「キリスト者は小さいキリストです」と言ったのです。キリストはお一人です。しかし、キリストを信じる人は沢山いるわけです。仮に小さくても。

◆「わたしは、イエス様を信じる者の中で一番も小さい者です」と言ったのは使徒パウロでした。しかしこの人が本当に当時の世界伝道をしたのですね。イエス様はガリラヤの狭い地方で伝道なさっただけですが、そのイエス様に捕えられたパウロは、自分は信者の中でもっとも小さい者ですと言っているのですが、その彼が世界の中心のローマにまで福音を伝えたのです。このパウロによって、信仰に導かれた人々は、イエス様がなさったよりもっと多いと言ってもいいわけですね。この「大きい」という字は、「広く」と訳してもいいわけです。もっと広いところに、イエス様に捕えられた一人、一人のキリスト者が、もっと広い領域に、イエス様と共に、イエス様と一つにされた者として、その恵みの福音を伝えるようになる。そういう意味がここに込められています。パウロはガラテア書でこう書いております。2章20節です。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、このように肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」と書いています。「生きているのはわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」正に自分とイエス様との一体性を、これ程明瞭に語った人はおりません。

◆イエス様はこう言われました。「はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。」この最後の「わたしが父のもとへ行くからである」ということは何を言っておられるのでしょうか。先の讚美歌287番の4節にこうあります。「ゴルゴダの丘の十字架の上で 罪人ゆるした 昔を偲んで 救い主イエスの あわれみを想う」。これがイエス様の三十数年の地上の歩みです。しかしイエス様は蘇られ、そして父のもとへ、天に上られるわけです。次回読むのですが、今日の箇所は隣ですね。15節「あなたがたは、わたしを愛して愛するならば、わたしの掟を守る。わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして。永遠にあなたがたと、一緒にいるようにしてください。」別の弁護者。弁護してくれる者、或いは、慰めてくれる者でもいいのですけれども、父なる神は遣わしてください。そして永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。」こういうことがイエス様の「アーメン、アーメン」と最後に言われた言葉です。わたしが父のもとへ行く。そして永遠の弁護者を、父はあなたがたのもとに送ってください。この慰め主は、わたしたちが「聖霊」とお呼びする神様のことです。

◆そのようなことでありますので、私たちはいろんな意味で小さい者です。けれどもこの小さい者と神様は、イエス様は、慰め主なる聖霊様は、常に共にいてくださるのです。三位一体のなる神様は、わたしの内にあって生きて働いておられるのですから、わたしたち人間がするのですけれども、イエス様がわたしの内にあって生きて働いておられるのです。イエス様と私たちは本当に一体なのです。これがわたしたちクリスチャンなのです。これを、イエス様を信じる信仰の中身の中心点と言ってもよいと思います。それを、ヨハネ福音書はこういう形でわたしたちに言ってくれているわけです。すーっとは分かりにくいのですけれども、分かれば、正にこれぞ福音なのですね。先ほど申しましたけれども、10月31日は『宗教改革記念日』です。それはマルチン・ルターが『95カ条の提題』を掲げた日です。これは95カ条にわたって、わたしはこうに思います。このように聖書を読んでいますということを掲げて、みんなでこの問題を討論いたしましようという、当時のしきたりにのっとなってなした、問題提起です。

◆「免罪符」という言葉を聞かれたことがあると思います。これはカトリック教会が献金の代わりに信徒に与えた一時的罪に対する罰の免償証書のことです。中世末期、教会の財源増収のために乱発されたと言います。1517年、聖ピエトロ大聖堂建築のための「免罪符」販売に対しルターがこれを批判し、宗教改革の発端となったのです。ルターはこの「免罪符」の販売に対し、「神様の恵みと救いはそんな安っぽいものではない」と問題提起したのです。それで「95カ条の提題」の第1条冒頭の言葉は、週報に書いてある通りです。「わたしたちの主であり師であられるイエス・キリストが、『汝ら悔い改めよ』と言われる時、主はキリスト者の全生涯が日々悔い改めであることを求めておられるのである。」これが第一条の冒頭の言葉です。ルターはこの言葉に色なことを込めたと思います。「イエス・キリストはわたしたちの全生涯の日々このわたしと共に歩んでくださる。」「今、私の内にあって、働いておられる。」そういう認識を全部ここに込めていると思います。イエス様はこういうこともおっしゃっていますね。「わたしは道であり、真理であり、命である（14章6節）。」「道」というのは人生歩んで行く道です。と同時に、「人が歩むべき道」ですね。イエス様言われます。「わたしを愛する者はわたしの業を行う。」その道ですね。ヨハネによる福音書は紀元1世紀ごろに書かれました。ですから他の福音書より大分遅れて書かれたものですが、新約聖書はギリシャ語で書かれています。そして当時はギリシャ・ローマの世界ですね。それに対してユダヤというのは正に辺境ですね。ガリラヤは辺境のもう一つ辺境です。そういうギリシャ、ローマの世界で大事なことは哲学であり、「真理」なのです。真理がその世界で一番大事なことなのです。

◆そして「わたしは命である」と言われます。本当に命に至る道、真理は、わたしのだとイエス様は言われます。一つ一つ展開させます。わたしたちの人生の道として、歩んで行くわけです。そのイエス様と私は一体だ。その人生の道で色んなことに遭うわけです。遭うのですけれども、本当に命であり給うキリ

ストがわたしの内におられるのですから、何が起ころうとそれは命であり、命に至る道なのです。そのようなことで、ルターは、「主イエスは、わたしたちの全生涯が日々悔い改めであることを求めておられるのである」と第一条に書きました。「悔い改め」という言葉は、ちょっと否定的に聞こえると思いますが、キリストがどういうお方なのかを日々新たに知って、命から命への道を歩んでいくのだという含みをルターは語っていると思います。

◆それで、わたしたちは自分が何者でもないという自覚を持たないクリスチャンはいないと思いますが、けれども自分の罪とか不甲斐なさに捉われて、わたしたちはキリスト者としては実に貧弱なキリスト者になってしまっているのではないのでしょうか。キリストがわたしの内に、どんなに貧弱であろうが、キリストがわたしたちの内において生きていてくださるわけですから、わたしたちは否定的な謙遜でなくて、小さいけれどキリストなのだと言った、その自覚をわたしたちは回復しないとイケないのではないのでしょうか。今日の週報の中段の上に、今年の標語聖句が掲げられています。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」イエス様が父なる神様に遣わされてなされた業、そのお言葉は、聖書に書かれてある通りですね。そのように、「わたしもあなたがたを遣わす」と言われるのです。イエス様は、イエス様を否認した弟子たちにこう言っておられるのです。このように、週報の真ん中に記されておりますけれども、わたしたちの実際の歩みは、イエス様がわたしたちの内において、かつてなされ、今もなされておられる、その御業に、イエス様と一体になつて行くものとされているのだという自覚は、わたしをはじめ、皆さんにおいても、きわめて希薄なのではないのでしょうか。ルターは499年前、一人で聖書を読んで立ち上がったのです。そしていわゆるプロテスタント教会が今に至って、来年500年になるわけですが、今教会は本当に弱っています。イエスさまが、神様と一体であられる、そのイエス様がこの私と、わたしたちの教会と常に一体であつて下さるのだということを、わたしたちは忘却しているのではないのでしょうか。その点で、わたしたちは本当にもう一度、思いを新たに、この主を信じて、主の御言葉を真に受けて、小さくてもキリストとしての歩みをなして行く。これは傲慢なことではなくて、キリストご自身がわたしたちに求めておられることであります。

◆お祈りいたします。

愛に富み給う、主イエス・キリストの父なる神様

あなたの御顧みを、わたしたちはいかに感謝し、ほめたたえても足るものではありませんけれども、あなたのご自身のすべてをわたしたちのために、投げ捨てて、わたしたちに朽ちない命を与えてくださいました。そのことを感謝しつつ、わたしたちの内生き給うあなたを、日々覚えつつ、信仰から信仰への歩みをなさしめて下さい。この祈り主・イエス様の御名を通し御前にお献げいたします。アーメン。